

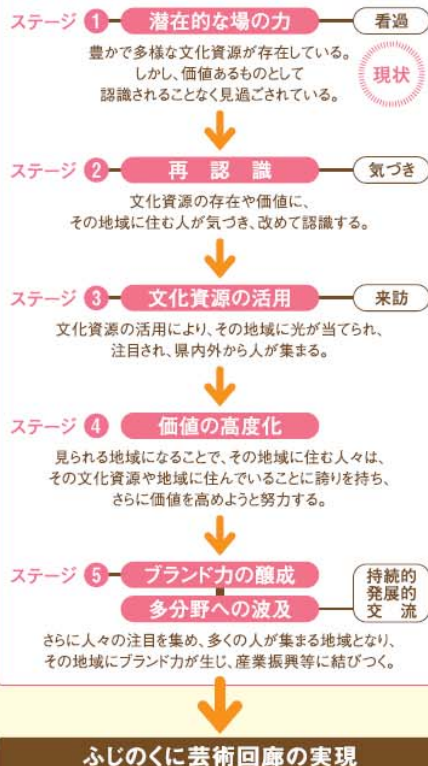
ふじのくに芸術回廊

静岡県は、豊かで多様な文化資源を有し、東西文化の融合の地でもあります。

それらの文化資源を再認識し、県内外に魅力を伝え、注目されることにより、地域で暮らす人も誇りを持って、さらに価値を高めようとしていきます。

こうした道筋をたどりながら、県内でいつでもどこでも多彩で魅力的な文化の花が咲き、国内外から憧れられる地域＝「ふじのくに芸術回廊」の実現をめざしています。

「ふじのくに芸術回廊」実現へのアプローチ



衣食住を考えるミーティング

平成22年度から始まった「衣食住を考えるミーティング」は、地域に根ざした生活文化と地域産業の新たな連携を探る取組である。

第1回は、天竜川流域を中心とする西部地域を対象に開催した。「衣」文化を彩る遠州地域の繊維ファッション、北遠地域の雑穀をはじめとする「食」文化や農山村の景観を生かしたもてなしによる地域振興、そして天竜美林といわれる豊かな森林資源を活用する「住」文化…。

暮らしに根ざした貴重な文化資源が生きている、地域の豊かさを改めて実感する一日となった。

1 川勝平太 静岡県知事基調講演要旨

●衣食住は文化の源

衣食住は生活の基本であると同時に文化の源でもあります。日本は、明治維新以来、東西の文明を吸収し終わって21世紀を迎えています。異文化のエッセンスを溶け込ませて、今の日本文化があり、これからは、既にあるものを捉え直して発揮すればよいのです。

●和服を生かす

たとえば「衣」。みなさんはYシャツの下に下着を着ておられると思いますが、西洋ではYシャツが下着なので、その下には何も着ませんし、その上に羽織る背広はドレスコートと同じ意味ですから、人前で背広を脱いでYシャツ姿になるということは、西洋では本来あり得ません。背広にYシャツという出で立ちは、北緯60度以上の国の正装であり、その上に毛織物のコートを着るのは、日本の気候にはそぐわないのです。

日本人はもともと和服という風通し良く、フォーマルでも着られる独自のファッションを持っています。毛織物に匹敵する生地の開発も、日本の技術なら可能です。

●本県は食材王国

「食」でいえば、今さかんに問われている食料自給率はカロリーベースで計算されていることに疑問を呈したい。カロリー過多の時代、日本人のあるべき食生活を考えたら、旬の食材、多種多様な食材を少しずつバランスよく摂取するのがベターではないでしょうか。その点、静岡県には高いポテンシャルがあります。富士山、南アルプス、伊豆半島、浜名湖、駿河湾に遠州灘と、山海の大自然に囲まれた静岡県は、219品目の食材を持つ日本一の食材王国です。しかも各食材のレベルが高く、その栽培技術は芸術的とも言えます。私は静岡県の農産物を「農芸品」と命名し、それらを育む美しく多様な自然の中で食べていただく地産地消の理想を実現したいと思っています。

●家・庭一体

「住」については、全て木造である必要はありません。土台はコンクリートと鉄筋で強度を増せば良いのです。この会場も、木材が多用されているが、公共建築もそうした工法により、立派に成り立ちます。日本においては、庭と建物は、一体のものと考えられてきました。例えば、金閣寺を思い浮かべると、周囲に池があり緑があるから、美しいと感じられるのです。庭屋一如(ていおくいちにょ)、易しく言えば、家・庭一体です。暮らしに庭の感覚を取り入れることを提唱したいと思います。つまり、地球環境と調和した住まい方、暮らし方です。海外においても、大都市を見た人は、次には郊外に行きます。そこには、普通の生活があり、それが魅力的に映り、来訪者には宿泊できる施設があり、初めて訪れても標識が整備されていて不自由しないなどの配慮が行き届いています。天竜浜名湖線沿線は、そうした地域になれると思います。定期借地権や借家権など、住める制度を整えることも一案でしょう。

●思いやりと季節感

日本が誇るべき生活文化のベースには、春夏秋冬の季節感があり、日本人は何事も四季で分類する文化的遺伝子を持つと考えています。

そして美しく見えるもの、デザイン的に優れたものとは、本来、誰にとっても使いやすく気持ちの良いもので、使う人への「思いやり」の結晶ではないかと考えます。衣食住の生活に、「季節感」や「思いやり」を生かしたものを、まずはここ県西部から発信していただきたいと期待しております。



PHOTO/1-2基調講演会場 3.衣・食・住に